

FAQ

島オオカミとプロジェクトに関するご質問

■縄文オオカミとは？

プロジェクトの対象動物。かつて日本にはニホンオオカミ（学術名称：Canis lupus hodophilax）と、ヤマイヌが混在しており、いまだその存在は明確にわけられず、日本列島に生きたオオカミらしき生き物を総称して呼ばれる。北海道に生きていた大陸のオオカミであるエゾオオカミよりも体が小さく、別の動物（亜種）であったことが確かめられている。

※本プロジェクトにおいても、かつて日本に生きたオオカミを対象に縄文オオカミと呼ぶこととしている。

■アレキサンダーオオカミとは？

プロジェクトの対象動物。現在アラスカのアレキサンダー諸島に生息するオオカミ（学術名称：Canis lupus ligoni）で、大陸に棲むタイリクオオカミ／シンリンオオカミの別種。一般に言われる大陸に棲むオオカミよりも体が小さい。夏場は海由来のサケを食べるという特徴がある。

■縄文オオカミとアレキサンダーオオカミの共通点と考えられる特徴

大陸のオオカミが島に渡り、1万年以上の歳月を経たために、体が小さくなる島嶼化（とうしょか）が起こっている。一般に言われる大陸のオオカミ（Ave.10）よりも少数の集団（Ave.5）で群れをなし、縄張りが狭く、隣の群れと争いをせず、海由来の生物（サケ、貝類、クジラの残骸など）をたべる。日本とアラスカ、5000Km離れた土地にあっても、環境が近いと体格や食性が似てくる。また、そのことで暮らしぶりに多くの共通点が現れてくる。

■なぜ縄文オオカミ？

現在の日本最大の自然環境問題である、シカの食害による日本国土の森の消失が挙げられる。かつての日本の空間に確かに存在していた縄文オオカミに注目し、日本の森の履歴を考察するため。

また、日本の森に、捕食者としてのオオカミが必要なのか。その問を投げかけることで、かつていたオオカミを想像し、オオカミを構成員に含む生態的空間の履歴を多くの人が現実の「自分にも関わってくる問題」として考える機会を提供する。

果たして、オオカミを日本に導入することで、日本の森は豊かさを取り戻すのか。また、鹿の食害問題の解決となるのか。そしてそれは、人々にとっての豊かさにも繋がるのか。多くの人が考えることのないままに、時が過ぎている。もっと生活者主体の議論が必要であることは、言うまでもない。そのためには、まず対象動物について、より深く多面的な知識を得る必要がある。そのための縄文オオカミである。

■なぜ南東アラスカ？

縄文オオカミがかつて生活していた環境と、アラスカの島オオカミの暮らしの近似性を仮定しているからである。地球に現存するオオカミの中で、人が住む本州島や四国島と比べて、生息環境が似ているのが南東アラスカの森である。日本に近い島の生態系内で生きるオオカミにフォーカスすることで、日本にかつていたオオカミ、あるいはこれから導入されるかもしれないオオカミを写真や映像で見た人は、現実に近い問題として鑑賞し、体験できると考えている。

■オオカミの大きさと生態

南東アラスカの森に住むオオカミの個体はオスで20Kg前後であり、縄文オオカミの大きさに近い。また、生息域 (territory & home range) の大きさも大陸に棲むオオカミのそれと比べて小さい。これは島の広さと個体重に相関 (島嶼生物地理学の法則) が働いており、縄文オオカミの生息域の広さは、南東アラスカの島オオカミのそれに近かったのではないかと考察できる。

■ オオカミと関わるその他の哺乳動物

南東アラスカの島オオカミが捕食しているシトカオグロジカも、ニホンジカとほぼ同じ大きさの90Kg平均である。また、その島にはツキノワグマよりやや大きいアメリカクロクマが生息している。ヒグマは3万5千年前を境に絶滅し、現在は生息していない。

■ 縄文オオカミとアレキサンダーオオカミは同じなのか

これまでの遺伝的解析によれば、ニホンオオカミ (*Canis lupus hodophilax*) とアレキサンダーオオカミ (*Canis lupus ligoni*) は、近いとはいえない。しかしオオカミは、大陸がつながってさえいれば、ディスパーザル行動により、数世代で大陸間を移動できる移動能力を持つ。したがって、オオカミについて言えば、遺伝的近似性よりも、生活のスタイルの（生態的）近似性がオオカミという動物の「近さ」を規定する本質であると考えている。

■ なぜ DNA の解析が必要か

まだよく知られていない縄文オオカミとアレキサンダーオオカミの生態について、新たな情報を得るため。縄文オオカミに関しては、これまで石黒らによって行われてきた遺伝的解析は、対象を定義づけるには情報に不足する部分が多く、ニホンオオカミについては、mtDNA による解析しか行われていなかった。新たな手法により解析することで、明らかとされる部分が多く残っている。展望として、二種の島オオカミの共通部分、タイリクオオカミとの異なる部分を見極めたい。

■ なぜ生態撮影をするのか

日本にかつて生きていたオオカミの姿を少しでも想像してもらうため。また、縄文オオカミだけにこだわることなく、多くの人へオオカミという動物を知ってもらうため。

■プロジェクトはどんな方法で進めるのか

遺伝解析のフェーズ

本プロジェクト研究での結果を一般の人達にとっても価値あるものとして遂行していくために、まずは、これまでの研究報告からニホンオオカミを再定義し、どんな動物であったのかを遺伝情報を含め、多面的に考察しなおす。そののち、遺伝子解析を行い、結果から比較しなおす。

生態撮影のフェーズ

また、人々がオオカミのいる山野をイメージしやすいよう、生きる実態を記録する。日本の自然環境と近似的環境に生息するアレキサンダーオオカミの生態を観察記録する。

展示会・各メディアでの発表と講演のフェーズ

ニホンオオカミの遺伝学的見地と現存する島オオカミの生態的な生活記録をまとめ、各メディアを使って新たな視点を投げかける。そのなかで、オオカミという動物は果たして日本に必要なのか、あるいは日本の自然空間のあり方を、豊かさという視点から、問い直す活動をする。

以上、本プロジェクトは大きく3つのフェーズにより構成される。

■サンプル解析

サンプル解析の履行は、アイルランド Trinity College Dublin にて行う。比較検体として、ニホンオオカミ (*Canis lupus hodophilax*)、アラスカ州アレキサンダー諸島に生息するオオカミ (*Canis lupus ligoni*)、大陸と限られた面積の島との比較として、アラスカ州デナリ国立公園に棲むタイリクオオカミ (*Canis lupus occidentalis*) の3種のサンプルを取得する。

最新のDNA解析により、絶滅した縄文オオカミという動物と他種との比較検討を行い、研究報告をまとめる。

■生態撮影（詳細は、別紙③オオカミ撮影を参照）

オグロジカ、クロクマが生息する森である POW 島（日本の特に本州北部に近い生態空間）に棲むオオカミを撮影取材し、現地研究者の研究データも含め、その生態を明らかにする。

地元の研究者と協力してアレキサンダーオオカミの生息地に自動カメラ装置を設置する。撮影装置の設置場所は、営巣地周辺、ランデブーサイト、サケを頻繁に捕獲する狩猟サイト、それらを行き来するメインの通路の計5箇所。設置時期は、春から夏にかけての子育ての季節に注力する（現地条件により変更あり）。また、プロジェクトリーダーの中島が期間中営巣地近くのキャビンに滞在し、遠吠えの録音、足跡調査など、フィールド調査を行う。並行して展示会・写真集で使用するスチールフォト、ムービーの記録撮影も行う。

■プロジェクトの成果報告と展望

展示会・各メディアでの発表と講演（追加可能性：写真集の出版・番組制作）

以上、得られた結果としての研究論文と写真・映像をまとめ、講演を含む展示会、写真集、番組制作という三種のメディアを利用して発表する。ただし、一般の人からのフィードバックや意見を直接得られやすいという理由から、展示会を主体とする。

展示会では、科学コミュニケーション展示会という形で一般の人々へ開かれた紹介をし、多くの人へ興味を促す。開催予定の日本3箇所すべての展示会からフィードバックをまとめ、人々の興味関心について考察し、今後の展開へとつなげる。具体的な展示構成や日程スケジュール詳細については、（別紙④日本での展示発表を参照）